
空への道行き

土田かこつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空への道行き

【Nコード】

N5610Z

【作者名】

土田かこつ

【あらすじ】

「一週間僕に付き合ってくれたら、痛みのない方法で君を殺してあげる」

古びたビルの屋上、少女の飛び降りを引き止めた謎の男は軽薄そうな顔でそう言った……。

偶然の邂逅が少女の過去に光をあてる。

売れない作家の計画。死にたがりの少女の打算。

二人の思惑の行方はいかに。

シリアスよりの青春もの。ラストは救いのあるものになる予定です。

いつか見た空の色・1

その黒い小さな箱を開けた瞬間、彼が息をのむのがわかった。

きらびやかな電飾に彩られた並木道。

傍らに並ぶベンチで、隣に座る彼の顔を見上げた。

橙の柔らかな明かりが横顔を照らし出す。

手渡したばかりの小箱の中には、銀の十字架のネックレスがあるはずだ。

クリスマスにかこつけた、彼への初めてのプレゼント。

もちろんちゃんと男物で、デザインもそれほど派手じゃないものを選んだつもりだった。

だが。

ふたに右手をそえた彼は箱の中身を見つめたまま動かない。

怪訝と言うより不安になる。

もともとネックレス自体は自分の選択ではなく彼のリクエストだったのだが。

好みに合わなかったのだろうか。

「シルバーのクロス、欲しいって言ってたでしょう？」

見かねて声をかけると、彼は大きくため息をついて顔を上げた。

吐き出された呼気が白い。

「つけていい？」

こつちが頷くよりも先に、長めの鎖を頭からかぶるようにして首にかけた。

深緑のセーターに銀色がよく映える。

シンプルな形も線の細い彼にあっていた。

「なかなか様になってるじゃん」

ほっとして少し笑う。

彼はネックスを確かめるように俯いた。

「ん、ありがと」

つと、彼の手が伸ばされた。

髪にごみでもついてたか、とぼんやりと見送った腕は視界の横を通りすぎ……、気づけば体を引き寄せられた。

「！」

呼吸が近い。息がつまって言葉が出ない。体が熱を上げていく。自分の心臓の音ばかりがうるさく、彼の鼓動が感じられない。

「…ちよつ、と」

みじろぎしようにも抱きすくめた腕はゆるがない。

油断した。

普段から態度や口ぶりこそ積極的だが、彼が直接に触れてくることはなかった。

せいぜい制服の上から捕まれるか髪の毛をかき回すくらいがいいところで、手をつないだこともない。歩くときは必ず人一人分間をあけていた。

もどかしくも心安い距離感を、これまでずっと保ってきたのに。

「ああい」

声が少しだけくもって耳に届く。

「なんか、ちよつと泣きそう」

「馬鹿」

甘えをふくんだ声が少しだけ情けなくて笑った。

ようやく体から力が抜けて、彼の肩にあごをのせる。

「うん。馬鹿だなあ」

ため息とともに吐き出された言葉が冷たく耳をくすぐって消えていった。

寒かった。

街中がむやみやたらにきらきらしていた。

でもそれが苦にならないくらいには自分も浮かれていた。
そんな季節。
今は、昔の。

憂鬱な月曜日・1

ぼんやりと白い、うす曇りの空を見上げて少女はため息をついた。

休み明けの月曜日、気だるい空気がただよう平日の昼下がり。

おそらく、はたからすれば気まぐれに授業をサボった女子高生が暇をもてあましてるように見えただろう。

彼女が腰掛けているのが、古びたビルの屋上の錆びた鉄柵でもなければ。

そこは駅前通りから離れた町のはずれにある、開発から取り残された古いビルだった。

もともと電子部品メーカーの自社ビルだった。会社は倒産したものの建物は放置され、そのまま用途のないオブジェのように町に居座り続けた。

もっとも、最近では肝試しの子どもたちやじゃれつく場所を探すカップルによって新たな需要を得ていたようでもある。

少女は柵の外に投げ出した両足を揺らしながら空を見ていた。

その顔に思いつめたような表情はない。ただ何かをふっきったような目で空をながめていた。

（私が飛び降りたら）

ここは危ない場所として再び封鎖されることになるのだろうか。子供たちから秘密の遊び場を奪ってしまうのはしのびないかな、なんて考えが頭をよぎって苦笑した。

しかたない。

どうしようもない。

どうでもいい。

乾いたあきらめが感情を支配していく。

視線を下に落とす。

見慣れたローファーのはるか先、コンクリートの地面。
彼女の最後の目的地。

もう一度顔を上げ、白い空を焼き付けてまぶたを閉じる。

そのまま何もない中空に身を躍らせようとかかどで鉄柵を蹴りつけ、

「！」

瞬間、身体に衝撃が走った。

予想していた浮遊感はない。

地面に打ち付けられた？ まさか。

こんなに意識が残るはずがない。痛みもない。

第一、感じた力が前へではなくうしろへの。

困惑する少女の頭上で誰かがため息をつく気配がした。

「落ちたら痛いぞ？」

頭のすぐ上から聞こえたのは、的確なようでひどく的確はずれな言葉だった。

飛び降りようとした瞬間に少女を後ろから抱きよせて引き止めた

男は、そのまま抱えあげて柵の内側におろしてしまった。

下から見えたからね、間に合ってよかったよ。

どこか真剣味にかける口調であっさりと言われて唇を噛む。

エレベーターは動かない。下から階段で上ってくるにはそれなりに時間がかかるはずだ。

そんなに長い時間、空に見とれていたのか。

あの古い非常階段を音もなく駆け上げられるはずもないのに足音さ

え気づかなかった。

そんなに自分の意識に気をとられていたのか。

「なんでとめたの」

理由なんて聞いても意味はない。通りすがりのお人よしに決まってる。

わかっていても言わずにはいらなかった。

「んー。可愛い女の子がいなくなるってのは世の中にとって結構な損失だろう？」

状況に似合わぬ軽口に、あらためて男を見る。

ダークグレーの長いコート。中のセーター靴も、目深にかぶったつばの広い帽子もすべて黒に近い灰色だ。肌も浅黒い。夕闇の中にいたら保護色になって見えなくなってしまうそうだ。

顔は若く見える。だがどこか時代がずれたような格好だった。

「おとなしいね、君」

黙ったままの少女に男が笑いかける。

「こういうの止められた人って、正直もつと抵抗するものだと思うてた」

目をそらしてそっけなく言う。

「別に。死ぬのなんていつでもできる」

止められたことは腹立たしいが、こうなった以上ことを荒立てずにすませるべきだろう。

警察や家に連絡がいくようなことになれば二度目がやりにくくなる。

幸い男はあまり生真面目なタイプではなさそうだ。

騒がなければきつとこの場を切り抜けられる。そう算段をつけた。だが。

「じゃあさ。一週間だけ僕に付き合ってくれないかな」

緊張感のない声が少女の期待を裏切った。死にぞこないにどんなナンパだ。

呆れた少女が突き放すより先に、男が低くささやいた。

「一週間付き合ってくれたら、痛みのない方法で君を殺してあげる」

軽い口調はそのままの物騒な物言い。

だが、少女にはこの上なく魅力的な条件で。

しかめた顔を覗き込む男の表情は軽薄そうなくせにどこか底知れない。

「自殺の手助けは犯罪でしょう」

口をついてでた言葉は自分でも言い訳めいていて。

新手の詐欺にでも引っかけたような気分で相手をにらんだ。

憂鬱な月曜日・2

立ち話もなんだから、と連れてこられたのは路地裏の小さな喫茶店だった。黒ずんだレンガ造りの店内は薄暗く、コーヒーと煙草の匂いが漂う。

男は慣れた様子で店に入り、少女に席をすすめた。

注文をとりに来た店員が去るのを見送って、しびれを切らしたように少女が口を開く。

「結局、あなたは何なの」

「んー、通りすがりの吸血鬼、かな」

こともなげに返ってきた言葉はあまりにも突飛で、少女は眉をひそめて男を見る。

「……は？」

「信じない？」

意味がわからない。「冗談にしても脈絡がなさすぎる。

少女の目は明らかに不審なものを見るようで。

露骨な反応に男は肩をすくめたてあつさりと言いかえた。

「月傘既望。しがない物書きさね」

「ツキカサ、キボウ？」

少女は怪訝な声を出した。どこかで聞き覚えのあるような名前だった。しかし、既望と名乗る男の顔は記憶にはない。

「小説家？」

もつとも物書き、つまり作家なら名前だけを知っていてもおかしくはないかもしれない。考え直して軽く首を振る。

「君の名前は？」

「佐野葵」

しかたなく名乗った少女、葵はしかめた顔で既望を見た。

まだ本来の用件を聞いていない。既望は頷く。

「それでさ。今書いてるのに死にたがりの女の子が出てくるんだけ

ど、どうも筆が進まなくて。話を聞かせてもらえないかな、と」
間に合ってよかったよ。

笑って言ったあの言葉は、「助かってよかった」ではなく「取材
相手が捕まってよかった」という意味だったのか。

助けられたのが不満だったはずなのに、それはそれで妙に癢に触
って葵は眉間のしわを深くした。

「本当に殺してくれるの」

「ちゃんとつきあってくれたらね」

「どうやって」

いらだちもそのままに言いつのる。

結局、既望の口車にのる形でここまでできてしまったが、望みどお
り最後まで面倒をみてくれるかどうかは正直かなりあやしい。

しかも痛みのない方法で、と既望は言った。

いったいどうするつもりなのだろう。何か薬でも使うつもりなの
か。まさか本当に血を吸うわけでもないだろうに。

できるなら死んだ後であり事件になるようなことは避けたかつ
た。

既望は少し驚いた顔をして、ふっと息を吐くように笑った。

「それは秘密」

からかう口調は相変わらず。

人を食った笑顔もそのまま。

だが、細めた目の奥にさっきまでとは違う色を見た気がした。

（この、顔）

見知らぬ男の顔のはず。

なのにその表情は葵がよく知るものに似て。

聞いただすことも忘れて葵は息をのんだ。

からかうような笑顔の、その目の奥に一瞬浮かんだ違う色。

何かを抑えるような。こらえるような。あきらめにも似た何か。

見慣れぬはず既望の顔に呼びおこされたのは、葵が記憶から追い

出すことのできなかつた少年の面影だった。

いつも調子のいい口ぶり与人懐っこい笑顔の少年が、不意打ちのようにのぞかせた表情。気づくか気づかないかのほんの一瞬浮かんで消える。

既望の顔立ちは彫が深く肌も浅黒い。

記憶の中の少年は線が細くて色も白い。

顔のつくりはまるで違う。

なのに、表情のつくりが同じなのだ。

見るものにかすかな痛みを抱かせる目の色。

葵が、その意味を知ろうとしてついになわなかった……、

「お待たせしました」

ふいに、第三者の声が葵の思考をさえぎった。

店員がコーヒーと紅茶とそれぞれの前においていく。

コーヒーカップを引き寄せた既望の顔をうかがえば、そこにはさつき見た色はかけらもない。

（見間違い、か？）

馬鹿みたいだ。何を今更。

仮に目の前の男が似た表情を見せたからといってそれが何だというのだ。

既望は手帳を開き、じゃあ改めて、と口を開いた。

「それで、動機はなんだったんだろう」

「さあね。空が綺麗だったから、とか」

既望は少し目を見張り、それからおかしそうに笑った。

「なかなか詩的でいいけど、ちょっと読み手が納得しないかな」

葵の投げやりな調子を気にするふうもない。

さつき見せた一瞬の目の色以外、既望の表情はほとんど変わらなかった。

からかうような笑み。せいぜい軽く驚いてみせるくらいだ。

どうしたら違う顔をあらわすだろうか
同情でも引いてみようか。

「彼氏が死んだからとかならないの」

「へえ、それは大きいな」

既望が少し身を乗り出した。

葵が引けたのは同情ではなく興味だけだったらしい。

落胆というほどでもない落胆。苛立ちの形にならない苛立ち。
かすかに波立った感情を、大きく息を吐いて落ち着ける。

（まあ、いい）

ただの取材。

結局は他人事。

既望がその態度をつらぬくなら、こちらもただ情報を提供すればいい。

どうせ切り捨てて置いていくだけの記憶だ。

最低限満足させて殺してもらえばいい。

過剰な同情よりよほどわずらわしくないだろう。

既望が感情をはさまないというのなら、こちらも感傷は交えない。

「まあ、実際は彼氏でも何でもないけど」

「付き合ってたわけではないのかい？」

「死んだときには」

そう。彼が死んだとき、葵はただの他人だった。

その少し前までは四六時中隣にいたとしても。

「彼も自殺？」

葵は首を横に振った。

「交通事故。左折してきた車にひかれたの」
小さく苦笑する。

「もっとも、信号無視したのは車じゃなくてそいつのほうだって言うから、実際事故だったのかもわからないんだけど」

既望は頷いて、手帳にペンを走らせる。

「それはいつの話かな」

「前の春休みの終わり」

「三ヶ月前か」

既望は考え込むように体を引いた。

「ただの後追い、という感じではなさそうだね」

妙にきつぱりとした物言いに葵は眉をひそめて身構えた。

何をいうのだろう、この人は。

「彼が死んで、だけど縁はすでに切れていて、なおかつ事故からまだいぶ時間がたっている」

葵の顔をのぞきこむ。

「どうして今、死のうと思ったんだろう？」

彼が死んだから、だけでは理由にならないと。

後追いなどというステレオタイプの説明では納得できないと。

共感も同情も哀れみも用いずに、事実を追う口調で動機を探ってくる。

葵自身が気付きもしなかった感情の裏側。

唐突に、低く鈍く柱時計が鳴った。

針が三時を差している。

「じゃあ、これは宿題だな」

話を切り上げるように既望は言った。

このあと用事があるという。拍子抜けした葵の顔をのぞきこむ。

「もつとしゃべりたい？」

「まさか」

解放してくれるなら願ってもない、とあくまで突き放そうとする葵に笑う。

「それは残念。じゃあ、悪いけどあとはよろしく」

既望は薄い財布から千円札を抜き出してテーブルに置くと席を立つた。

去りぎわ、顔だけをむけて付け加える。

「また明日も頼むよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5610z/>

空への道行き

2011年12月20日20時48分発行